歴史を証言する報道写真は誰のものか
――水俣病とベトナム戦争の写真から再考する

徳山　喜雄

はじめに――半世紀前に誕生した2枚の写真

報道写真をめぐって表現の自由とプライバシーのそれぞれの権利の衝突が、クローズアップされている。日本国憲法でいうならば、第21条の表現・言論の自由と、第13条の個人の尊重（尊厳）、幸福追求権のせめぎ合いとなる。

プライバシー権や肖像権は、憲法13条から導きだされた「新しい人権」ともいわれている。近年のプライバシー意識の高まりとともに、表現・言論に自由との折り合いのつけ方が複雑になり、さまざまなところで争点になっているが、その写真の「公共性」の軽重が大きな鍵となる。本稿では「公害の原点」といわれる水俣病と、世界的な戦争であるベトナム戦争で撮られた歴史的な写真をもとに、報道写真は誰に、あるいはどこに帰属するのか、考えたい。

水俣病については、日本ともかかわりの深い米報道写真家W・ユージン・スミス（1918－78年）が撮影した「入浴する智子と母」の変転をたどる（写真1参照）。智子さん（以下、敬称略）は胎児性水俣病患者である。ベトナム戦争の写真はナパーム弾の誤爆を受け、大やけどを負って逃げ惑う少女ファン・ティー・キム・フックさん（以下、敬称略）を撮った「ナパーム弾の少女」を取り上げる（写真2参照）。

当時15歳の智子を抱いて母親の良子が浴槽に入る「入浴する智子と母」は1971

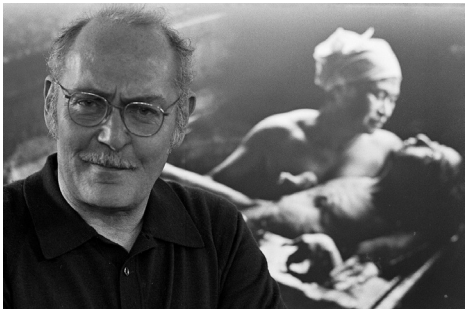

写真1　「入浴する智子と母」のパネルの前に立つユージン・スミス（石川武志撮影）

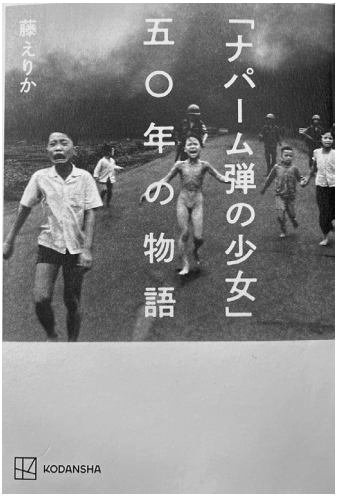

写真2　藤えりか著『「ナパーム弾の少女」50年の物語』（講談社、2022年）の表紙。使われつづける写真「ナパーム弾の少女」

年12月に撮影され、米国の写真週刊誌「LIFE」1972年6月2日号に掲載された。自国の攻撃機から投下されたナパーム弾を被弾、泣き叫びながら走る9歳の「ナパーム弾の少女」は1972年6月にAP通信カメラマンによって撮られ、世界に配信された。

いずれの写真もちょうど50年前に雑誌や新聞に掲載された（本稿は2022年11～12月に執筆）。この間、「入浴する智子と母」は被写体の智子の父母と著作権者の意向で、約20年間にわたり展示や印刷物への使用が禁止されるなど封印された。「ナパーム弾の少女」は全裸で少女が走っていることから、児童ポルノにあたるとされ、一時的に交流サイト「フェイスブック」から削除されるという事態になった（いずれもモノクロ写真）。

歴史の目撃者となって社会を変えた1枚の報道写真がプライバシーや肖像権、人権の観点から掲載の是非が問われ、揺れてきた。人類の遺産ともいえる、すぐ

れた報道写真は誰に帰属するのか。著作権者なのか、被写体なのか、社会なのか。これは、詰まるところ「公共性」と「個人の尊重（尊厳）」のどちらに秤の目盛りが傾くのかということになると思われるが、考えていきたい。

1. 水俣病を告発する「入浴する智子と母」

1.1 日本と縁が深い米写真家ユージン・スミス

水俣市は熊本県の最南部に位置し、鹿児島県と県境を接する。九州本土と天草諸島に囲まれた穏やかな内海の不知火海（しらぬいかい）が眼前に広がり、水俣湾はさらにその内海であった。リアス式海岸の豊かな漁場で、古くから「魚（いお）湧く海」と呼ばれていた。

化学工業メーカーのチッソ株式会社水俣工場は、1932年から有毒のメチル水銀をふくむ工業廃水を水俣湾に流しはじめた。水俣湾さらに不知火海では、メチル水銀が魚介類の食物連鎖によって水銀を濃縮し、水俣病を引き起こした。汚染された魚介類を食べた漁村の住民らが発病し、公式には水俣病の発生は1956年5月1日、水俣保健所が脳症状を主とする「原因不明の奇病発生」と公表したときとされる。実際は40年代から発病がはじまっていた。タチウオやクロダイ、スズキ、ボラなどの魚が海面に浮き上がり、アサリやカキなどの貝の死滅も広がり、岸辺では腐敗臭が鼻をついた。ついで汚染された魚介類を食べた動物に異変がおきた。水鳥やカラスが飛べなくなったり、とつぜんと落下したりすることもあった。ネコはもつれた足で狂ったように走り回り、狂い死にする「猫踊り病」が報告されていた。1954年8月、「猫てんかんで全滅」と水俣市茂道集落でのネコの狂い死にを報じた熊本日日新聞の記事が、ただならぬ事態を伝えた最初の報道だった。そして、同じようなことが人間の身にも降りそそぎ、高度成長期に患者が多発することになった[1)]。

水俣病を世界に告発することになる写真家ユージン・スミスは1918年12月30

日、カンザス州ウィチタ生まれ。母親の家系はネイティブアメリカンのポタワトミ族で、父親は事業に失敗して36年4月に猟銃自殺した。父が亡くなったころには、すでに報道写真を撮っており、複数の雑誌で仕事をこなし、43年以降は2度にわたって太平洋戦争に従軍した。

1度目は43年7月、フライング誌の従軍記者として空母インディペンデンス、次いで空母バンカー・ヒルに乗艦。ラバウルやマーシャル諸島、マリアナ諸島、トラック島などの太平洋地域での空爆作戦を爆撃機に同乗して取材した。2度目は44年5月、LIFE誌と契約し、太平洋での日米の激戦を地上で撮影。サイパン、グアム、レイテ、硫黄島の戦闘を取材し、沖縄の攻防戦で45年5月、日本軍の迫撃弾により重傷を負い、約2年間のリハビリ期間を要した。

戦後はLIFE誌と専属契約をし、社会問題などを組み写真でルポルタージュする「フォト・エッセイ」といわれるスタイルを確立、読者からの圧倒的な支持えた。初期のものとしては、1948年にコロラド州の小さな町の医者の仕事を丹念に追った「カントリー・ドクター」(1948年9月20日号) がある。28枚もの写真を使い注目された。ほかにノーベル平和賞受賞者のアルベルト・シュバイツァーを題材にし、旧仏領赤道アフリカ (現ガボン) でハンセン病医療に従事する姿を50年代に撮影した「慈悲の人」(1954年11月15日号) が名高い。

写真構成やプリントにこだわり抜いた50本ものフォト・エッセイを、米国のみならず世界的に影響力があったLIFE誌に発表し、充実したフォト・エッセイの黄金時代を築いた。だが、「慈悲の人」に掲載する写真や文章をめぐり、編集部と対立、この作品を最後にLIFE誌を去った。その後、写真家としての最後の大きな仕事となる水俣を訪れる[2)]。

2018～19年にかけて東京・恵比寿の東京都写真美術館でユージンの生誕100年を記念する大規模な回顧展が開かれた。それに併せて企画されたシンポジウムのパネリストとして米国から来日したユージンの次男ケビン・スミスは、ユージンと日本のかかわりについて次のように語った[3)]。

「父は日本をこよなく愛していました。アメリカにいるときよりも、くつろいでいるようでした。それはどこにいっても温かく迎えられたからでしょう。第2次世界大戦の曙から水俣の黄昏までの父の写真家としてのキャリアは、日本にはじまり日本に終わりました。彼にふさわしいものでした」

1.2 ニューヨークから水俣へ

ユージン・スミスはどのような経緯で水俣を訪れたのだろうか。ユージンと結婚し、水俣をともに取材したアイリーン・美緒子・スミス（1950年－）から直接聞いた話（2017年12月など）や、文献をもとにたどる。

アイリーンとの出会いが大きかった。ユージンは1970年8月、アイリーンとニューヨーク・マンハッタンにあるロフトで出会った。富士フィルムのテレビCMの撮影のため、ユージンの通訳としてカリフォルニアからやってきた。日本人の母と米国人の父をもつアイリーンは、日米語のバイリンガルでスタンフォード大学で学んでいた。当時20歳、ユージンは51歳だった。

ユージンはアイリーンと出会った1週間後に「ニューヨークで私のアシスタントをし、一緒に暮らしてほしい」と頼む。父親より年上の男性からの申し出に戸惑うアイリーンに対し、こうもいった。「大学に戻ったら、私は死ぬ。君が乗った飛行機がカリフォルニアに着くまでに死んでしまうだろう」。結局、アイリーンは新学期がはじまろうとしていた大学には戻らなかった。「わずか1週間でユージンに変えられてしまった。こんなに人に欲されたのは初めてだった」と振り返った。

二人の出会いから2カ月がたったころ、ニューヨークで暮らすユージンとアイリーンのもとに、写真編集者の元村和彦（後に出版社の邑元社を主宰）が訪れ、「公害によって人が奇妙な死をとげている。水俣を撮ってみないか」と提案。「その瞬間、『二人で行くんだ。写真を撮ろう。そこに行かなくてはならない』と、ユージンと私は思った」。

水俣病について語った元村は、ユージンとアイリーンに大きな影響を与え、行動を起こさせることになった。だが、当時のユージンは沖縄戦で負傷した古傷の痛みや、それを和らげるための薬、紛らわすためのアルコール依存などで、肉体的にも精神的にもボロボロだった。「いつも戦争の後遺症、傷の痛みがあった」とアイリーン。だが、ユージンにとって最後の大きな仕事、日本人の血が流れるアイリーンにとっては「ふるさと日本の今」を問う最初の仕事のはじまりになった。

二人は出会って1年後、71年8月16日に来日。29日に入籍し、東京・芝のプリンスホテルで披露宴をした（後に離婚）。そして、水俣病患者多発地域の水俣市月ノ浦に民家を借り、71年9月から74年10月までの3年におよぶ水俣取材がはじまった。アイリーンは写真と向き合うユージンについて「31歳年上だったが、こころは私よりも若かった」とも話した。

ここで、水俣でユージンのアシスタントをした石川武志（1950年－）に触れたい。写真学校をでたばかりの21歳の石川は1971年、ユージンとアイリーンが水俣取材の準備のために滞在する東京・原宿で二人に出会い、暗室作業などを手伝ううちに打ち解け、ユージンから「一緒に水俣に行かないか」と誘われた。そのときは特に水俣病に関心がなく迷ったが、東京の石川の部屋代と水俣での食費など滞在にかかわる費用を払ってもらえるということだったので水俣行きを決断した。そして、漁村の一軒家で石川とユージン、アイリーンの3人が一緒に暮らす生活がはじまった。石川とアイリーンは同い年だった[4)]。このような訳で、石川はユージンの水俣病取材の様子をアイリーンとともに最もよく知る人物で、筆者の徳山も複数回にわたり、話を聞いている。

1.3 胎児性水俣病患者の入浴シーンを撮影

水俣に移り住んだユージンは、水俣病の患者やその家族とていねいに人間関係を築きながら、取材・撮影をしていった。だが、先述したようにユージンの体調はすぐれなかった。日米の沖縄戦を従軍記者として取材していた1945年5月22

日、日本軍の迫撃弾の金属片を左腕と顔面に受け、口蓋が砕けた。手術を数回したが、歯の噛み合わせが悪くなり、ほとんど食べられなかった。

「毎日10本の牛乳と、オレンジジュースに生卵を入れて混ぜた飲み物が栄養の補給源だった。それにサントリーレッドの中瓶を1日1本、ストレートでチビリチビリ飲んでいた」とアイリーン。

そのようななか、胎児性水俣病患者で肢体不自由な上村智子（56年6月13日生まれ）と出会った。胎児性水俣病のなかでも最も重症で、当時15歳。LIFE誌などのキャプションに「ウエムラ・トモコ」と書かれているが、正しくは「カミムラ・トモコ」だ。智子は母親の胎盤を通じてメチル水銀に汚染され、目もみえず、口も聞けない状態で生まれた。両親は毎晩、智子を抱いて眠り、ことのほか可愛がった。

ユージンは何度も上村家に足を運び、両親の愛情を表現するシーンとして母親の良子が智子を入浴させる場面を撮りたいと申し出た。両親は入浴シーンが撮影されることに最初はためらったが、「水俣病を広く知らせたい」との思いから承諾した。ユージンとアイリーンは71年12月、自宅からさほど離れていない上村宅を訪れ、智子が母親に抱かれて浴槽に入る姿をファインダーに収めた。2人が初めて水俣を訪れてから約3カ月後のことで、3年におよぶ長期取材で最高峰となるこの写真は、早い時期に写されることになった。

ほの暗い浴室の湯が輝き、湯船に浮かぶように浸かる智子。その光る目は天空を射るかのようで、それを見つめる母親の眼差しは慈愛にあふれていた。水俣病を象徴する傑作写真「入浴する智子と母」が誕生した瞬間であった。この写真は撮影翌年のLIFE誌72年6月2日号に掲載、高度経済成長の陰として世界的な反響を呼び、水俣病の存在を世の中に知らしめた。

「智子と母」は単に公害を告発するだけのものでなく、良子の智子に向けた視線が、母が子どもに注ぐ愛情の深さを力強く表現し、見る人々に感動を与えた。72年5月21日、ローマにあるミケランジェロ作の彫刻ピエタ（十字架から降ろさ

れたキリストを抱く母マリアの彫刻で、ピエタには慈悲などの意味がある）が精神を患った地質学者に鉄槌で叩き割られるという事件があった。

LIFE誌が皮肉にもこの破壊されたピエタを「智子と母」と同じ号に掲載。カリフォルニアに住むある読者が、LIFE誌72年6月23日号の「編集者への手紙」欄に「ピエタはもとに戻らないだろう。しかし、聖母は生きつづけている。智子の母の美しい顔に流れる涙のなかに」との投稿を寄せている。この投稿以外にも聖母マリアと智子の母良子の姿を結びつけた人たちが多かった。

撮影から6年たった77年12月5日、家族の深い愛情に包まれた智子は、父母の名を生涯にわたって一度も呼ぶことなく21歳で旅立った。しかし、もの凄い勢いで認知されていった「智子と母」は、水俣病を象徴するアイコンとなり、智子の死後も新聞や雑誌、国内外の写真集、ポスター、教科書などに使われつづけた。

水俣病患者救済に尽くした医師の原田正純は、著書『宝子たち』[5)]で次のように語っている。「どうしてあんな写真を（ユージンに）撮らせたの」と良子に聞くと、「よかじゃなかですか、あれを見た人が、政府のえらか人、会社の偉か人が見て、環境に注意してくれらすなら、この子は世間様のお役にたっとです」といい、さらに「それになあ、先生、智子がわたしが食べた魚の水銀を全部吸い取って、一人でからって（背負う）くれたでしょうが。そのためにわたしも、後から生まれたきょうだいたち（6人の妹弟）もみんな元気です。……わが家の恩人です。……ほんに智子はわが家の宝子（たからご）ですたい」と話したという。

1.4 撮影後「ぐったりとした様子だった」

「入浴する智子と母」は、どのように写されたのだろうか。アシスタントの石川は撮影の際、現場にいなかった。「女性がいる風呂場に僕が入っていいのかと思い、撮影に立ち会わなかったのが悔やまれる」（東京新聞2022年7月26日夕刊）と話す。

ユージンの撮影の様子をみていたのは、アイリーン以外に智子の両親ら家族だけだ。アイリーンはどのように撮影したのか、詳しくは語っていない。石川は智子の両親から聞いた話として次のように著書[6]に記している。

「当日は2、3分ですぐ終わると思っていたら、お湯にもう少し浸かってとか、もう1回とかで30分くらい撮影するんですよ」「今までいろんな写真家が智子を撮影していきましたが、私が智子を抱いていたら抱いている写真、智子が食事をしていたら食事をしている写真など、その場で数カット撮影するだけだからすぐに終わると思っていたんです」「ユージンさんの撮影はなかなか終わらないから、お風呂が残り火でお湯は熱くなるし、智子はぐったりしてくるし内心イライラしてきました」と、そのときの心情を聞かせてくれたという。

また、父親の好男は「水俣ほたるの家便り」に寄稿し、「（撮影の際、）智子は体をまっすぐにして、曲がろうとしなかったと妻は話してくれました。写真はほんの一瞬で終わるものと思っていましたので、気安く撮影に応じたのがいつわらぬ気持ちでした。（母親の良子は）智子は風呂からあがって何かぐったりした様子だったといっていました」[7]

撮影の様子をうかがえる資料がある。ユージンは1977年、アリゾナ州ツーソンにあるアリゾナ大学のセンター・フォー・クリエイティブ・フォトグラフィー（CCP）に膨大な自身の作品や関連資料を寄託（後に寄贈）。ツーソンに移住し、同大学で写真講座をもつことになった。

ノンフィクションライターの山口由美は、石川とともにCCPを訪れてユージン関係の資料を調査した。著書『ユージン・スミスー水俣に捧げた写真家の1100日ー』[8]にその内容を書いているので参照する。

CCPから提供された資料のなかに、青い表紙のノートにアイリーンの筆跡で、水俣月ノ浦の住所とユージン・スミスの名前、プロジェクト名の「Japan Ⅱ Pollution」と記してあった。「Pollution」は汚染の意味だ。「1971年8月28日～」との日付があり、「R1」（Rはロールの略で、「フィルム1」という意味）から「R560」

までそれぞれ何を撮影したか、アイリーンの筆跡で書き込まれている。つまり、3年間におよぶ水俣にかかわる取材で、ユージンは560本のフィルムを撮影したことになる。R1は「新宿」、R2は「東京で夕方の会合」とあり、R3から水俣の写真がはじまる。智子を撮ったフィルムは、R129「智子ちゃん」、R130「智子ちゃん」、R131「月ノ浦周辺、近くからのチッソ」、R132からR134までの3本も「上村智子ちゃん」とある。入浴の写真が2日にわたって撮影されたという証言はないことから、フィルム5本分が智子と母親が入浴する一連の写真と考えられる。フィルム5本といえば、単純計算で180枚（1ロール36枚×5本）。重症の胎児性水俣病患者の入浴シーンの撮影としては、異例ともいえる数だ。山口は「確かに予想外に時間がかかったに違いない」と推測する。

正確な撮影日について青いノートには記述がなく、山口によると、R129「智子ちゃん」の写真の3本前のR126に1971年12月24日の日付があり、R135には同年12月25日の日付が書かれていた。

つまり、智子を写したR129，130，132，133、134は、クリスマスイブの12月24日とクリスマスの25日に撮られた写真の間にあることから、整理する際の勘違いなどがないかぎり24日と25日の間に撮影されたと考えられる。まさにピエタの聖母マリアが抱く、キリストが生誕した日であった。

2. 歴史を語る写真を封印、そして解除へ

2.1 LIFE誌に掲載し写真集を出版

水俣病は、チッソが水俣湾にたれ流した工業廃水が原因になっていることは、被害が公式確認された3年後の1959年に分かっていた。だが、その後もチッソは9年間にわたって廃水を流しつづけ、国も対策をしなかった。旧厚生省が工業廃水が原因の公害病と認定したのは68年9月のことだ。

1969年に患者家族がチッソに損害賠償を求め熊本地裁に提訴（水俣病第1次訴

訟）したが、世界的には水俣病はほとんど認知されていなかった。72年1月、千葉県市原市のチッソ五井工場で、水俣病患者とその支援者らがチッソの従業員と衝突、乱闘になり取材していたユージンも暴行を受けて負傷した。世にいう五井事件で、このときの傷でのちに失明の危機にさらされる。沖縄戦での古傷の後遺症とも相まって最悪のコンディションのなか、ユージンは米写真週刊誌LIFE 1972年6月2日号に「入浴する智子と母」を掲載し、75年5月にアイリーンとの共著で英語版写真集『MINAMATA』（日本語版『写真集　水俣』三一書房は80年出版）を出版、世界各国で大反響を呼んだ。患者家族が第1次訴訟で全面勝訴したのは73年3月で、その1カ月後の同年4月に写真展「水俣――生　その神聖と冒瀆」が、東京・池袋の西武百貨店で開かれた。

写真集にユージンの写真への愛情と信念を伝える、味わい深い言葉が記されている。

> 「写真はせいぜい小さな声にすぎないが、ときたま――ほんのときたま――一枚の写真、あるいは、ひと組の写真がわれわれの意識を呼び覚ますことができる。……私は写真を信じている。もし充分に熟成されていれば、写真はときには物を言う。それが私――そしてアイリーン――が水俣で写真をとる理由である」（中尾ハジメ訳）

水俣病と向き合い、『苦海浄土』を著した石牟礼道子は、写真集について「ここには神が造り給うたものがなんでもある。神話的次元での残酷と野蛮と偽善と策謀、絶望の底の愛と戦いがあり、神もくつろぐ野のエロスまである。……ユージン・スミスとアイリーンは、そのような表情の瞬間を人間的肉眼でとらえ、現代の聖画を再構成して見せるのである」（『写真集　水俣』）と評した。

石牟礼は上皇后の美智子妃と交流があり、朝日新聞（2013年10月28日朝刊）によると、13年7月に東京のホテルで開かれた社会学者の故鶴見和子をしのぶ「山

百合忌」の会で、当時皇后だった美智子妃の隣に座り、2時間あまりを過ごした。皇后は「今度、水俣に行きますからね」と話し、パーキンソン病を患う石牟礼の皿に料理を取り分けた。石牟礼はその後、「今も認定されない潜在患者の方々は苦しんでいます。50歳を超えてもあどけない顔の胎児性患者たちに会ってやって下さいませ」と美智子妃に手紙を書いた。これを受けた両陛下は、公式行事としてではなく、胎児性水俣病患者2人に別途面会したという。

両陛下は水俣市を初めて訪れ、水俣病患者から差別を恐れて病気を隠してきたという話を聞いた。この後、天皇は約1分間にわたって思いを語った。

> 「やはり真実に生きるということができる社会をみんなで作っていきたいものだと改めて思いました」「今後の日本が、自分が正しくあることができる社会になっていく、そうなればと思っています」と。事前に用意した「お言葉」を述べるのではなく、率直に自らの考えを語るのは異例だ。

一方、現在の皇后の雅子妃も水俣と縁がある。母方の祖父にあたる江頭豊（2006年9月没）が1962年、常務取締役であった日本興業銀行からチッソに転出し、64年から71年まで社長、社長退任後は73年まで会長職にあった。激しい水俣闘争の最中に社長を務め、在任中の68年に水俣病が公害認定されている。水俣病患者に非公式に会うなど寄り添った美智子妃と、加害者側の社長と親戚関係にあった雅子妃。雅子妃は公式の場では口にしないが、水俣病をめぐる奇しき縁が皇室内に存在している。

2.2 賛否両論のなか「智子と母」を封印

ユージンの代表作となった「入浴する智子と母」は、智子の死後も脚光を浴びつづけた。LIFE誌への掲載から25年たった1997年7月、「20世紀100枚の写真」という番組を企画したフランスのテレビ局から、水俣病を象徴する「智子と母」

を提供してほしいとの依頼が智子の両親にあった。しかし、上村好男はそれまでの意思とは打って変わり、「亡き智子にゆっくりやすませてあげたい」（「水俣ほたるの家便り」10号）との思いをつのらせ、写真の使用とインタビューのいずれも断った。

その前年の96年、東京・品川で初めての大規模な水俣展が開催された。上村夫婦と深い交流があり、水俣展に講師として参加した原田正純やアイリーンらの証言によると、会場は熱気に包まれ、入浴する母子像をプリントした大きなポスターが、品川駅から会場までの至るところに貼られ、チケットやチラシにも使われた。しかし、剝げ落ちたポスターや路上に捨てられたチラシが、歩行者に踏みつけられた。上村夫婦はわが子を撮った写真の扱われ方にこころを痛めた。「あれだけ報道されるとお金が大部儲かるでしょうね」（「水俣ほたるの家便り」10号）という声が周囲から聞こえてくることもあった。このように傷つくことがあり、「水俣病の広告塔から智子を解放したい」という思いにかられた。

原田は母子像が踏みつけられる光景を見て、「わたしもそうですが、何人もの水俣病を知る人が顔をしかめました。……この写真は上村夫婦にとっては単なる写真ではないのです。この写真があちこちに貼られているということは、両親にとっては智子さんは亡くなって10年以上も経っているのに、まだ、働いているのです。……上村夫婦もさすがに疲れてしまいました。そこでアイリーン・スミスさんに『智子はもう十分働いたから、静かに寝かしてもらえんでしょうか』と頼みました」[9]と回想している。

ユージンの死後、写真の著作権を引き継いだアイリーンは、水俣展の主催者に母子像の写真を使うことを許可していた。「配慮が足りなかった。私の責任もあると思います」と率直に述べた。このようなことがあり、「智子と母」はアイリーンによって封印されることになり、20年以上にわたって新しく印刷されることも展覧会で展示されることもなくなった。

歴史を証言する写真を封印するにあたって、アイリーンは「『上村智子さんと

お母さんの入浴する写真』について」と題した、覚え書きを上村夫婦と交わしている。村上好男が「水俣ほたるの家便り」10号に寄稿した際に、同時に覚え書きを公開している。内容は以下のようなものだ。

1. 私、アイリーン・スミスは「上村智子さんとお母さんの入浴する写真」を上村さんご夫妻にお返しします。
2. これはこの写真に関する決定権が上村さんに帰属することを意味します。今後、この写真に関して依頼がありました時には、以下（別紙）の説明をし、写真の使用をお断りします。

文書の日付は、1998年10月30日で、アイリーンの自筆サインが入っている。

別紙には、撮影の経緯などが記され、「1998年6月7日、私は上村さんのご両親に会い、この写真の新たな展示、出版等を行わないことを約束しました」とある。

山口由美は「しばしば混同されるが、アイリーンは、写真のネガそのものを返したのではない、また著作権を譲渡したのでもない。『写真に関する決定権』を返したのである。その上で、写真に関する依頼は、アイリーンが断るとしている」と説明する[10)]。

2017～18年にかけて東京都写真美術館で催されたユージンの大規模な回顧展「生誕100年　ユージン・スミス写真展」においても「智子と母」は展示されず、同時に出版された写真集にも収録されなかった。

写真展開催にあたって主催者で、写真集の版元であるクレヴィス社長の岩原靖之は、「ユージン生誕100年の節目であり、封印から20年たつので解除してほしい」とアイリーンに直談判した。しかし、「アイリーンは断固として母子像を写真展で展示し、写真集に掲載することを認めなかった」と話す。

17年12月3日、アイリーンが参加した東京都写真美術館でのシンポジウム

「ユージン・スミスを語る」の打ち上げの懇親会があった。私も参加していた。この席で、母子像の扱いをめぐって激論になった。

写真展のためにユージンの写真を提供したアリゾナ大学CCPチーフ・キュレーターのレベッカ・センフは、「W・ユージン・スミス・アーカイブのあるCCPは、アイリーンと上村夫婦の意思を認め、『入浴する智子と母』の写真は展示していない。貸し出しもしていない」と話した。現在の著作権者と被写体側の意向の従うということだが、撮影者のユージンの考え方や社会の反応については、特に触れなかった。

水俣でユージンのアシスタントをした石川は「封印されたことが、すごく残念だ。普遍性をもつこの母子像は人類にとって失ってはならない芸術作品だ。ユージンが生きていたら、展示や掲載をのぞむと思う」と反対意見を述べた。

これに対し、アイリーンは「写真家には二つの責任がある。ひとつは被写体に対するもので、もう一つは見る側に対するものだ」という生前に繰り返されたユージンの言葉を引き合いにだし、石川の意見に反論した。

アイリーンは「被写体に対する責任」に重きを置き、石川は「社会に対する責任」にこだわった。撮影者本人のユージンは死亡しており、いまとなっては考えを述べることはできない。この夜、アイリーンと石川の二つの意見は平行線をたどり、歩み寄ることはなかった。

2.3 ハリウッド映画を契機に封印を解除

水俣病の公式確認から65年たった2021年9月、ユージンをモデルにした映画「MINAMATA－ミナマタ－」（アンドリュー・レビタス監督）が日本で封切られた。大ヒットとなった映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」シリーズの主演俳優ジョニー・デップの製作・主演で、「ジョニー・デップが伝説の写真家の遺志を継ぎ、世界に伝える衝撃の真実」「MINAMATAは終わっていない。ジョニー・デップがキャリアのすべてをかけて伝える。世界への警告と希望の光」などと宣伝され、

注目を集めた。

クライマックスで、アイリーンが封印していた「入浴する智子と母」の写真が映しだされた。アイリーンが考え方を変え、封印を解いたことになる。上村夫婦と覚え書きを交わしたのが1998年10月なので、23年ぶりに「智子と母」が再登場したわけだ。

写真展での展示や出版物への掲載を頑と拒んできたアイリーンの態度の変化に、関係者らは一様に驚かされ、困惑もした。しかも、使用しないと覚え書きまで交わした智子の両親の上村夫婦には事前に何も伝えておらず、「約束違反」といわれても仕方がない形での封印解除だった。

この点に関してアイリーンにインタビューを申し込んだが、「基本的に現在智子ちゃんの写真についてインタビュー行っていません」（2022年10月24日付メール）との回答があった。このため、映画の公開に合わせて朝日新聞がインタビューした記事（2021年10月16日朝刊「MINAMATA　あの1枚」聞き手・北野隆一）を引用しながら書き進めたい。

映画での写真使用を許諾したことについてアイリーンは、「脚本には入浴場面の再現が盛り込まれましたが、私は『写真は出せない』と答えていました。98年の約束があるからです。しかし、完成直前の2019年11月、監督から『やはり実物の写真を出した方がいいと思う』とのメールを受け取りました。私は映画をみないと判断できないと答え、ロンドンに行きました。試写を見た結果、写真の実物を映画に出すべきだと決断し、使用を許諾しました。ご両親には事後報告となりました、昨年、水俣で完成した映画を見てもらいました」と述べた。

これに対して聞き手が「智子さんの父好男さん（87）に、記者が改めて聞いたところ『アイリーンさんとの話し合いで、あの写真は出さないことになっている』との考えは変わらないとのことでした」と重ねて質問すると、「約束を守らなかったことになるのは承知しています。ご両親には申し訳ないと思っています。傲慢と思われても当然です。私には映画の内容はコントロールできません。だか

らこそ映画で実物を見せるのが大切だと思いました。『この映画に実物がなかったら、再現映像だけが現実にあるかのように世界に広まり、一生後悔する』と考えたのです」と答えた。

アイリーンは「約束を守らなかった」と率直に認めた。だが、映画の再現映像への危惧は述べているが、これまで力説してきた「被写体への責任」については触れていない。

映画の原案となった写真集『MINAMATA』の日本語版が2021年9月に再出版され、「智子と母」はそこでも使われた。それについてアイリーンは「写真集は絶版になっていましたが、フィクションである映画の再現場面が実物の写真に取って代わってはいけない。実在した患者さんを写したユージンの作品を世界に見てもらわなければ、と思いました。ご両親と会い、写真集を再出版したいとお願いする手紙を渡したところ、『写真集はいっぺん出版されたものだから』と、ご了承の電話をいただきました」と話す。

智子の父親の村上好男は、22年10月5日に88歳で他界した。改めて話をきくことは出来ないが、亡くなる約1年前に朝日新聞記者に、「『アイリーンさんとの話し合いで、あの写真は出さないことになっている』との考えは変わらない」と語った言葉が、公になったものとしてはおそらく最後ではないか。

以上が朝日新聞からの抜粋だが、歴史を深く目撃し、多くの人々の心を打った傑作写真をどのように扱えばいいのか、次章でベトナム戦争で撮られ、やはりアイコンとなった写真をみたうえで、最終章で併せて考えたい。

3. ベトナム戦争を象徴する「ナパーム弾の少女」

3.1 戦争終結を早める役割を果たす

南ベトナム軍機によるナパーム弾の誤爆で、大やけどを負った少女が全裸で逃げ惑う。ベトナム戦争末期の1972年6月8日、ベトナム・サイゴン（現ホーチミ

ン）近郊でAP通信カメラマンがこの様子を撮影し配信、ニューヨーク・タイムズ紙やワシントン・ポスト紙、ロンドン・タイムズ紙など世界の主要紙の1面を飾った。

ナパーム弾を浴びた少女の名前は、ファン・ティー・キム・フック、63年4月6日にサイゴン北西のタイソン省チャンバンで生まれた。当時9歳で、背中や腕など身体の3分の1が焼けただれた。AP通信サイゴン支局に現地雇用されたベトナム人カメラマンのニック・ウト（ベトナム語名：フイン・コン・ウト）が撮影した。

この写真は、民間人をも巻き込み、殺戮を繰り返す戦争の恐怖と残忍さをあますことなく伝え、世界に衝撃を与えた。米国をはじめ西側諸国の反戦運動を燃えあがらせ、泥沼化したベトナム戦争の終結を早める役割を果たした。この「ナパーム弾の少女」は翌年、ピュリツアー賞と世界報道写真大賞の2大タイトルを獲得、ベトナム戦争といえば多くの人がこの写真を連想するアイコンとなった。

ナパーム弾はガソリンに化学物質を混ぜてつくった兵器で、攻撃目標を摂氏1000度以上の高熱で燃えあがらせる。キム・フックが着ていた衣服は燃え、写真には全裸で写っていた。AP通信のスタッフのひとりが、少女のはだかを気にして配信を見合わせてはと提案したが、上司から却下されたという（ロサンゼルス・タイムス紙1987年8月20日）。このスタッフの懸念は杞憂になり、世界各国のメディアが大々的に扱った。写真評論家のヴィッキ・ゴールドバーグの著書によると、「（写真配信の）翌朝、はだかの少女の写真はどこの朝食のテーブル、どこの新聞売り場へ行っても見ることができた。AP通信はアメリカの新聞すべてが載せたのではないかと推定している」[11]という。

「ナパーム弾の少女」は撮影されて半世紀になるが、新聞や雑誌、写真集、ポスターなどに繰り返し使われてきた。最近では撮影50年の節目を迎えた2022年に、さまざまなメディアに再掲載された。ただ、少女が真っ裸であることと、大やけどを負い苦しんでいるという残虐性を考えあわすと、住民を巻き込む悲惨な

ベトナム戦争の姿を訴えるニュース写真として、撮影直後に報道するのには価値があると考えられるが、何十年にもわたって繰り返し使うことに抵抗感をいだく人もいた。

3.2「今度は『写真の女の子』がお返しをする番です」

私は2005年3月、この「ナパーム弾の少女」キム・フックにインタビューをする機会を得た。当時、朝日新聞が発行する週刊誌AERAのフォト・ディレクターをしており、キム・フックを日本に招聘した日本テレビから取材の打診を受けた。同テレビ局は写真展「地球を生きる子どもたち」を企画（東京・渋谷のBunkamuraザ・ミュージアムを皮切りに全国各地を巡回）、そのなかの1枚にくだんの写真があった。キム・フックはカナダ在住で、ユネスコ（国連教育科学文化機関）親善大使をしており、来日することになっていた。

私は渋谷のホテルで初めてキム・フックと対面した。彼女は1963年4月6日生まれで当時41歳、ナパーム弾を被弾してから32年の歳月がたっていた。ふっくらとした丸顔で、笑顔の美しい女性に成長していた。顔にはやけどを負っていなかった。

カナダから東京までの長旅で、体調がよくないと聞いていた。度重なる皮膚の移植手術を受け、疲れがちで傷跡が痛むためシャワーもぬるま湯か冷水しか浴びられないという。このため長時間のインタビューは出来ず、できるだけ要領よく進める必要があった。私は簡単な挨拶のあと、取材の趣旨を手短に話し、最初にもっとも聞きたかったことを単刀直入に切り出した。

> 「苦悩に歪んだ顔をし、全裸で逃げる自身の姿が、世界で繰り返し使われていますが、これについて抵抗感や嫌悪感はありませんか」

この質問に対し、キム・フックは「私の写真は歴史の偶然がもたらしました。

写真3　週刊誌AERA（2005年3月21号）の表紙。41歳になった「ナパーム弾の少女」ファン・ティー・キム・フック

そのお陰で、多くの人が助けてくれました。しかし、世界には助けの手が届かない子どもたちがいっぱいいるのです。今度は『写真の女の子』がお返しをする番です」と話し、この写真使用の申し出があれば進んで受けているとのことだった。

ただ、このような考えにすんなりとなった訳ではない。「この写真が嫌で嫌で仕方なかった」時期もあったが、1982年に新訳聖書に出会ったことと、94年に長男を授かったことなどで、気持ちが少しずつ変わり、最終的に「ナパーム弾の少女」の存在意義を最大限に引き出し、「助けの届かない世界の子どもたち」の一助にしたいと思うようになった。さらに、「一番の困難は、爆弾を落とした敵を〝ゆるす〟ことでした」といい、「いまは私の人生は神様の計画の一部であったと受け入れています」と語った。

このときのインタビュー記事はAERA 2005年3月21日号に掲載し、同号の表紙

にポートレート写真（坂田栄一郎撮影）を載せた（写真3参照）。キム・フックを独占的に取材できたのは記者冥利に尽きたが、それ以上に、思い出したくないであろう残酷な姿の写真が使われつづけることに対する彼女の心情や捉え方を聞き、長年の疑問が氷解したことが嬉しかった。

写真のキム・フックは両手を広げて走っており、この両手を飛行機の翼にたとえて、「写真の女の子は、走っているのではなく、（別の世界へと）飛んでいるのよ」との彼女の言葉も胸を衝いた。

3.3 フェイスブックが児童ポルノとして封印

ノルウェーの作家トム・エーゲランが2016年8月、ベトナム戦争の終結を早めたとされる「ナパーム弾の少女」を交流サイト「フェイスブック」（FB）に投稿したところ、FBは児童ポルノにあたるとして削除し、アカウントも停止した。

AFP通信などの報道によると、この「検閲」に反発した多くのノルウェー市民らが同じ写真を投稿したりシェアしたりしたが、FB側は写真を削除しつづけた。削除された投稿者にはノルウェーのソルベルグ首相もふくまれており、「写真の削除は共有された歴史に手を加えることと同じだ」などと批判、大論争になった。同国最大の日刊紙アフテンポステンはFBのマーク・ザッカーバーグ最高経営責任者（CEO）に宛てた「児童ポルノと著名な戦争写真の違いが分かっていない」との公開書簡を1面に掲載した。FBは9月に入って、「この写真の歴史や国際的な重要性は認識している」として削除した写真を復旧させた。

FBの利用者は当時17億人、世界の4分の1弱の人々が閲覧などをする巨大メディアである。FBは独自のアルゴリズム（情報処理手順）と担当者による人的な判断とを組み合わせたうえで、掲載の適否を決めているというが、影響力のあるメディアとしての責任を果たしているのかとの疑問の声が相次いだ。

創業者のザッカーバーグはかつて「われわれはテクノロジー企業であり、メディア企業でない」と表明した。しかし、人類の遺産ともいえるすぐれた報道写

真を葬り去る権限を有しており、アフテンポステン紙の公開書簡にある「あなたは世界でもっとも力のある編集者だ。その力を乱用している」との指摘を重く受け止めるべきだろう。

このように短い期間ではあるが、「ナパーム弾の少女」も封印された。「入浴する智子と母」は公害による残酷な被害を世界に訴え、「ナパーム弾の少女」は戦争の残忍さを世界に告発したものだ。ただ、いずれも被写体は少女で全裸であった。

次章ではこれらの写真をもとに、歴史的な報道写真の取り扱いについて考えたい。

4. むすび――公共の場に戻されることに

4.1 掲載の適否に一律の基準はない

最初に一般論として報道写真は誰に、あるいはどこに帰属するのか、3つの観点から述べる。

1) 一義的には撮影した人、つまり写真家が使用権を持つ。ただ、ポルノやグロテスクなものなど公序良俗に反する写真は新聞や雑誌などへの掲載が認められないが、掲載の適否の線引きは難しく一律の基準はない。媒体ごとの編集方針に沿って決められていくのが通例だ。つまり、同じ写真であっても、ある雑誌には掲載できたが、ある新聞には載せることができなかったということはよくある。
2) 次に、被写体が人物ならプライバシー権や肖像権があり、写っている人が掲載を拒んだ場合、報道写真が持つ公共性や社会性とプライバシー保護のどちらが重いかが、はかられることになる。アマチュア・カメラマンが街頭でスナップ写真を撮り、被写体の許可なく写真展などに出品した場合は賠償問題に発展することがある。ただ、新聞社や雑誌社のカメ

ラマンが報道目的で事件・事故の現場を撮影した場合、社会で共有する必要がありと判断され公共性が優先されることが多い。事件・事故の規模が大きくなればなるほど、被写体のプライバシー権や肖像権の侵害は免責されことになる。

3) さらに、フリー・カメラマンが死亡した場合は、家族やその写真家が指定する人物が著作権を継承することになる。報道機関に属するスタッフ・カメラマンの場合は通常、会社が権利を持ちつづける。

これら3要件をもとに、ユージン・スミスが撮った「入浴する智子と母」について考える。公害の原点ともいえる水俣病をテーマに撮影した写真で、1、2章で述べたように公共性はきわめて高い。被写体が未成年者で全裸であるが、重度の胎児性水俣病患者であるため意思表示はできず、両親が後見している。両親の了承を取って撮影、出版していたが、ある時期から当該写真の使用を両親が拒み、著作権の継承者がそれに同意していた。にもかかわらず、ハリウッド映画を契機に著作権継承者が両親の承諾を得ずに、写真使用をはじめたというケースだ。

さらに整理すると、写真は1971年12月に水俣でユージンが撮影、72年から98年まで四半世紀にわたり自由に使用ができた。その後、両親の村上好男、良子夫婦が写真の使用を拒んだことから、著作権継承者（撮影者ユージンは78年死亡）のアイリーン・美緒子・スミスが「この写真の新たな展示、出版等を行わないことを約束」し、村上夫婦と覚え書き（98年10月30日付）を交わした。ところが、ユージンをモデルにしたハリウッド映画『MINAMATA―ミナマタ―』が2021年9月に日本で封切られ、村上夫婦の承諾なしに「入浴する智子と母」がクライマックスシーンで映しだされた。著作権継承者のアイリーンは映画製作者に使用許可をだしていた。村上好男は「やっぱり使ってもらいたくはなかった。でも相談はなかったから」[12] とノンフィクション作家の石井妙子のインタビューに答え、前

出の朝日新聞記者の質問にも同様のこととを話している（朝日新聞2021年10月16日朝刊）。智子が全裸で写っていることに対する批判は、両親が許諾しているのに加え、圧倒的な当該写真の公共性によってほとんど議論されることがなかった。

約25年間におよぶ使用、その後20年以上にわたる封印を経て、再び使用という複雑な経緯をたどったケースだ。

次に、AP通信サイゴン支局カメラマンのニック・ウトが撮った「ナパーム弾の少女」を3要件をもとに考える。民間人、とりわけ子どもを巻き込む戦争の悲惨な姿を余すことなく伝える写真で、3章で述べたように、きわめて公共性が高い。戦争や大きな事件・事故を撮影した報道写真を使用する際、被写体の許諾は求められてこなかった。現在もその基準に大きな変化はない。AP通信サイゴン支局内で少女が全裸であることに懸念を示したスタッフがいたが、さほどの議論にならずに上司によって却下されている。撮影者のニック・ウトはスタッフ・カメラマンであるため、権利はAP通信が持っている。被写体のキム・フックは、撮影直後から現在に至るまで写真が使用されることに特段の疑義を呈していない。

4.2 一方的に写真の公共性を取り戻す

年の瀬もせまった2022年12月、私は資料などを再度確認するため水俣市を訪れた。ちょうどアイリーンも水俣に滞在しており、アイリーンと入れかわるように石川も水俣に入った。単なる偶然であるが、「入浴する智子と母」が世にでて50年という節目で、それぞれの思いがあったのではないか。

胎児性水俣病患者の多発地区の湯堂の高台から不知火海をのぞむと、冬にもかかわらず海は穏やかで静けささえ感じた。地元の人に尋ねると「内海なのでいつもこのように穏やかだ」という。だが、この静かな海にかつて工業廃水に混ざったメチル水銀が大量に漂い、未曾有の公害病が荒れ狂ったことを考えると、眼前

に広がる穏やかな海の姿がかえって凄みをもって迫ってきた。

本稿のテーマである歴史の目撃者となって社会を変え、その後も影響を与えつづける報道写真は誰に、あるいはどこに帰属するのか、考えたい。

アイリーンは、2章で述べたように考える手掛かりとして「写真家には二つの責任がある。ひとつは被写体に対するもので、もうひとつは見る側に対するものだ」というユージンの言葉を挙げた。後者の「見る側に対する責任」は事実を正確に伝えているのか、ミスリードしていないかといったものだろう。

前者の「被写体に対する責任」については解釈が分かれる。アイリーンの捉え方としては、被写体のプライバシー権や肖像権の保護が念頭にあるようだ。一方、水俣でユージンのアシスタントを務めた石川は、「『被写体に対する責任』とは、歴史の証言者となった写真を社会に還元していくことではないか。ユージンはこのように考えていたのでは」と説明する。二つの考え方が対立するが、ユージンはすでに他界しており、その真意を直接尋ねることは、もはやできない。

報道写真の歴史を振り返ると、多くの場合、公共性や社会性、換言すれば社会で共有する価値が優先されてきた。その際、被写体のプライバシー権や肖像権が消滅するとは考えず、被写体がもつ権利を侵害していることを認めたうえで、公共性や社会性の重みのために、侵害が免責されるという考え方に立ってきた。報道写真の公共性と被写体の権利を秤にかけて、その天秤がどちらに傾くのか、という考え方だ。

「入浴する智子と母」と「ナパーム弾の少女」の写真は、天秤にかけた場合、公共性の重さの側に傾いてきた。それに対して、際したる疑問も挟まれてこなかったといえる。「智子と母」については、著作権をもつアイリーンが、智子の両親との約束で覚え書きを交わして封印することになった。

これは著作権者と被写体側の双方の考えが公共性や社会性を上回ったケースだが、著作権者がハリウッド映画に使用されることを契機に、一方的に封印を解除するという予期せぬ事態になり、著作権者と被写体とのあり方が根本的に問われ

ることになった。

スミス撮影の水俣写真の著作権者であるアイリーンは、当初は映画に「智子と母」を提供することを拒んでいた。にもかかわらず、態度を一変させたことについて、重要な部分なので2章で引用したアイリーンの言葉を一部再録すると、「試写を見た結果、写真の実物を映画に出すべきだと決断し、使用を許諾しました。ご両親には事後報告となりました」といい、「『この映画に実物の写真がなかったら、再現映像だけが現実であるかのように世界に広まり、一生後悔する』と考えたのです」（朝日新聞2021年10月16日朝刊）と説明した。

こうして「智子と母」が有する公共性や社会性を、被写体側のプライバシー権や肖像権よりも優先させた。これは言葉を換えれば、「智子と母」を公共の場に返還したことになろう。両親の許可を得たうえで封印を解いたのなら、すっきりとした形でこの写真の公共性が再確認されることになったのだが、アイリーンは被写体側との話し合いの場を設けず、一方的に公共性を取り戻す結果となった。

4.3 すぐれた報道写真は社会に帰属

一方、「ナパーム弾の少女」については、被写体のファン・ティー・キム・フックは「この写真を公開しつづけて、戦争の犠牲者となった子どもたちへの一助としたい」と私のインタビューで明言している。しかし、当初からこういった気持ちになったわけではない。朝日新聞記者による撮影から50年後のインタビューで、キム・フックは「正直、以前はこの写真が嫌で仕方ありませんでした。苦痛に満ちた裸の少女の写真をなぜ撮って配信したの？と。この写真を見たり考えたりするたび当時の痛みや絶望、恥ずかしい気持ちが、子ども時代が失われたことなどを思い出し、とても悲しくなりました」（朝日新聞2022年9月8日朝刊「『ナパーム弾の少女』の50年」聞き手・藤えりか）と振り返っている。

南ベトナム出身のキム・フックは共産主義国であるベトナム政府によって広告塔として利用されつづけることから逃れたいと考え、キューバ留学中の1992年

にカナダに亡命した。その後、「94年に長男を出産し、彼を抱きながら『あの少女のような思いをさせられない』『この子だけでなく、世界中の子どもたちを守らなければ』と思うにつれ、この写真は私への力強い贈り物のように思えてきました。この写真を平和のために用い、もう戦争はたくさんだと人々に知らしめ、子どもたちのために人生を捧げよう」（同）と考えるようになった。

その後、戦争で傷ついた子どもたちを援助する財団を立ち上げ、アジアや中東、アフリカなどの世界各地を飛び回っている。

「ナパーム弾の少女」を撮ったニック・ウトはAP通信サイゴン支局からソウル支局、東京支局などを経て、ロサンゼルス支局を最後に2017年に65歳で定年退職した。彼は撮影後、キム・フックの火傷の治療に奔走し、報道によると50年後も家族のような付き合いをつづけており、撮影者と被写体の関係は良好だ。二人は22年11月、撮影地のベトナム・タイニン省チャンバンの当時暮らしていた場所を訪れ、知人らとの50年ぶりの再会を果たしている（VIETJOベトナムニュース22年11月15日）。

ベトナム戦争の終結を早めたとされる「ナパーム弾の少女」については、被写体であるキム・フックの心の葛藤はあったが、プライバシー権や肖像権を主張することはなく、自身を写した写真は社会に属し、活用していってほしいとの立場をとった。ただ、そのことで被写体が押しつぶされかねないという「不条理」が存在するという点はおさえておきたい。「ナパーム弾の少女」は反米の広告塔として徹底的に利用されるという側面があったが、これはすぐれた報道写真が背負う宿命のようなものである。

これまで論じてきたように、筆者である私の考えは、歴史の証言者であるすぐれた報道写真は、社会に帰属するという結論に達した。ただ、あらゆるメディアが同じ判断をするのではなく、媒体ごとに考え方が違い、多様な結論がある方が、民主主義社会の報道・表現の自由としては健全であろう。本稿では象徴的な2点の写真を挙げたが、他の写真もふくめてケースバイケースで考えていく必要

があろう。

インターネットの利用が社会に深く根を下ろし、写真が無断で縦横に拡散しつづけるようになった。それだけに余計に、各メディアが被写体の意向を十分に考慮したうえで、この報道写真を「なぜ掲載するのか」「なぜ掲載しないのか」という説明責任を果たすことがさらに求められてくるだろう。（敬称略）

注

1） 斎藤靖史、2021、「水俣病　歴史と解説」、W・ユージン・スミス、アイリーン・美緒子・スミス著『MINATA』（復刻版）クレヴィス、186–197

2） ユージンの経歴については次の2点を参照。W・ユージン・スミス、2017、『ユージン・スミス写真集』クレヴィス、190-191。徳山喜雄、2017、Yahooニュース特集「『写真はときには物を言う』――水俣を世界に伝えた米写真家の軌跡」（2017年12月26日配信）

3） 「生誕100年　ユージン・スミス写真展」（2017年11月25日～18年1月28日、東京都写真美術館）の関連イベントとしてシンポジウムを2回開催。シンポジウム①「ユージン・スミスを語る」（17年12月3日、同写真美術館）。パネリスト：ケビン・スミス（ユージンの次男）、アイリーン・美緒子・スミス（写真集『水俣』共著者）、レベック・センフ（アリゾナ大学CCPチーフ・キュレーター）、司会・コーディネート：徳山喜雄（本稿筆者）。シンポジウム②「ユージン・スミスの生きた時代」（18年1月14日、同写真美術館）。パネリスト：野町和嘉（写真家）、大石芳野（写真家）、司会・コーディネート：徳山

4） 石川武志、2012, 『MINAMATA NOTE 1971～2012　私とユージン・スミスと水俣』千倉書房、123-160

5） 原田正純、2009、『宝子たち―胎児性水俣病に学んだ50年』弦書房、25

6） 石川、2012、139

7） 村上好男、1999、「ユージン・スミス＋アイリーン・スミスの智子の写真と私の家族」『水俣ほたるの家便り』第10号（1999年7月1日発行）、1-3

8） 山口由美、2013、『ユージン・スミス－水俣に捧げた写真家の1100日－』小学館、81-89、93-94

9） 原田、2009、27-28

10） 山口、2013、200

11） ヴィッキ・ゴールドバーグ、1997、『パワー オヴ フォトグラフィ 下巻』（別宮貞徳監訳）淡交社、208
12） 石井妙子、2021、『魂を撮ろう　ユージン・スミスとアイリーンの水俣』文藝春秋、337

（2022年12月23日受理，2023年1月21日採択）